
【テキスト中に現れる記号について】

《》：ルビ
(例) 所謂《いわゆる》

|：ルビの付いていない漢字とルビの付く漢字の境の記号
(例) 今日 | 此際《このさい》、

私は禁酒をしようと思っている。このごろの酒は、ひどく人間を卑屈にするようである。昔は、これに依《よ》って所謂《いわゆる》浩然之氣《こうぜんのき》を養ったものだそうであるが、今は、ただ精神をあさはかにするばかりである。近来私は酒を憎むこと極度である。いやしくも、なすあるところの人物は、今日 | 此際《このさい》、断じて酒杯を粉碎すべきである。

日頃酒を好む者、いかにその精神、吝嗇《りんしょく》卑小《ひしょう》になりつつあるか、一升の配給酒の瓶《びん》に十五等分の目盛《めもり》を附し、毎日、きっちり一盛ずつ飲み、たまに度を過ぎて二盛飲んだ時には、すなわち一盛分の水を埋合せ、瓶を横ざまに抱えて震動を与え、酒と水、両者の化合 | 醗酵《はっこう》を企てるなど、まことに失笑を禁じ得ない。また配給の三合の焼酎《しょうちゅう》に、薬缶《やかん》一ぱいの番茶を加え、その褐色の液を小さいグラスに注いで飲んで、このウイスキーには茶柱が立っている、愉快だ、などと虚栄の負け惜しみを言って、豪放に笑ってみせるが、傍の女房はニコリともしないので、いっそうみじめな風景になる。また昔は、晩酌の最中にひょっこり遠来の友など見えると、やあ、これはいいところへ来て下さった、ちょうど相手が欲しくてならなかったところだ、何も無いが、まあどうです、一ぱい、というような事になって、とみに活気を呈したものであったが、今は、はなはだ陰気である。

「おい、それでは、そろそろ、あの一盛をはじめるからな、玄關をしめて、錠《じょう》をおろして、それから雨戸もしめてしまいなさい。人に見られて、羨《うら》やましがられても具合が悪いからな。」なにも一盛の晩酌を、うらやましがる人も無いのに、そこは精神、吝嗇卑小になっているものだから、それこそ風声鶴唳《ふうせいかくれい》にも心を驚かし、外の足音にもいちいち肝《きも》を冷やして、何かしら自分がひどい大罪でも犯しているような気持になり、世間の誰もかれもみんな自分を恨みに恨んでいるような言うべからざる恐怖と不安と絶望と忿懣《ふんまん》と怨嗟《えんさ》と祈りと、実に複雑な心境で部屋の電気を暗くして背中を丸め、チビリチビリと酒をなめるようにして飲んでいる。

「ごめん下さい。」と玄關で声がする。

「来たな！」屹《ぎ》っと身構えて、この酒飲まれてたまるものか。それ、この瓶は戸棚に隠せ、まだ二盛残ってあるんだ、あすとあさってのぶんだ、この銚子《ちょうし》にもまだ三猪口《みちょこ》ぶんくらい残っているが、これは寝酒にするんだから、銚子はこのまま、このまま、さわってはいけない、風呂敷でもかぶせて置け、さて、手抜かりは無いか、と部屋中をぎょろりと見まわして、それから急に猫撫声《ねこなでこえ》で、「どなた？」

ああ、書きながらも嘔吐《おうと》を催す。人間も、こうなっては、既にだめである。浩然之氣もへったくれもあったものでない。「月の夜、雪の朝、花のもとにても、心のどかに物語して盃出したる、よろずの興を添うるものなり。」などと言っている昔の人の典雅な心境をも少しは学んで、反省するように努めなければならぬ。それほどまでに酒を飲みたいものなのか。夕陽をあかあかと浴びて、汗は滝の如く、髭《ひげ》をはやした立派な男たちが、ビヤホールの前に行儀よく列を作って、そうして時々、そっと伸びあがってビヤホールの丸い窓から内部を覗《のぞ》いて、首を振って溜息をついている。なかなか順番がまわって来ないものと見える。内部はまた、いもを洗うような混雑だ。肘《ひじ》と肘とをぶっつけ合い、互いに隣りの客を牽制《けんせい》し、負けず劣らず大声を挙げて、おういビールを早く、おういビールなどと東北 | 訛《なま》りの者もあり、喧々囂々《けんけんごうごう》、やっと一ぱいのビールにありつき、ほとんど無我夢中で飲み畢《おわ》るや否や、ごめん、とも言わずに、次のお客の色黒く眼の光のただならぬのが自分を椅子から押しのけて割り込んで来るのである。すなわち、呆然《ぼうぜん》として退場しなければならぬ。気を取りなおして、よし、もういちど、と更に戸外の長蛇《ちょうだ》の如き列の末尾について、順番を待つ。これを三度、四度ほど繰り返して、身心共に疲れてぐたりとなり、ああ酔った、と力無く呟《つぶや》いて帰途につくのである。国内に酒が決してそんなに極度に不足しているわけではないと思う。飲む人が此頃《このごろ》多くなったのではないかと私には考えられる。少し不足になったという評判が立ったので、いままで酒を飲んだ事のない人まで、よろしい、いまのうちに一つ、その酒なるものを飲んで置こう、何事も、経験してみなくては損である、実行しよう、という変な如何《い

か》にも小人のものの欲しげな精神から、配給の酒もとにかくいただく、ビヤホオルというところへも一度突撃して、もまれてみたい、何事にも負けてはならぬ、おでんやというものも一つ、試みたい、カフェというところも話には聞いているが、一たいどんな具合いか、いまのうちに是非実験をしてみたい、などというつまらぬ向上心から、いつのまにやら一ぱしの酒飲みになって、お金の無い時には、一目盛の酒を惜しみ、茶柱の立ったウイスキーを喜び、もう、やめられなくなっている人たちも、かなり多いのではないかと私には思われる。とにかく小人は、度しがたいものである。

たまに酒の店などへ行ってみても、実に、いやな事が多い。お客のあさはかな虚栄と卑屈、店のおやじの傲慢《ごうまん》貪慾《どんよく》、ああもう酒はいやだ、と行く度毎に私は禁酒の決意をあらたにするのであるが、機が熟さぬとでもいうのか、いまだに断行の運びにいたらぬ。

店へはいる。「いらっしゃい」などと言われて店の者に笑顔で迎えられたのは、あれは昔の事だ。いまは客のほうで笑顔をつくるのである。「こんにちは」と客のほうから店のおやじ、女中などに、満面卑屈の笑をたたえて挨拶して、そうして、黙殺されるのが通例になっているようである。念いりに帽子を取ってお辞儀をして、店のおやじを「旦那」と呼んで、生命保険の勧誘にでも来たのかと思わせる紳士もあるが、これもまさしく酒を飲みに来たお客であって、そうして、やはり黙殺されるのが通例のようにになっている。更に念いりな奴は、はいるなりすぐ、店のカウンタアの上に飾られてある植木鉢をいじくりはじめる。「いけないねえ、少し水をやったほうがいい。」とおやじに聞えよがしに呟《つぶや》いて、自分で手洗いの水を両手で掬《すく》って来て、シャッシャと鉢にかける。身振りばかり大変で、鉢の木にかかる水はほんの二、三滴だ。ポケットから鋏《はさみ》を取り出して、チョンチョンと枝を剪《き》って、枝ぶりをととのえる。出入りの植木屋かと思うとそうではない。意外にも銀行の重役だったりする。店のおやじの機嫌をとりたいたいに、わざわざポケットに鋏を忍び込ませてやって来るのであろうが、苦心の甲斐《かい》もなく、やっぱりおやじに黙殺されている。渋い芸も派手な芸も、あの手もこの手も、一つとして役に立たない。一樣に冷く黙殺されている。けれどもお客も、その黙殺にひるまず、なんとかして一本でも多く飲ませてもらいたいと願う心のあまりに、ついには、自分が店の者でも何でも無いのに、店へ誰かはいつて来ると、いちいち「いらっしゃあい」と叫び、また誰か店から出て行くと、必ず「どうも、ありがとう」とわめくのである。あきらかに、錯乱、発狂の状態である。実にあわれなものである。おやじは、ひとり落ちつき、

「きょうは、鯛《たい》の塩焼があるよ。」と呟く。

すかさず一青年は卓をたたいて、

「ありがたい！ 大好物。そいつあ、よかった。」内心は少しも、いい事はないのである。高いだろうなあ、そいつは。おれは今迄、鯛の塩焼なんて、たべた事がない。けれども、いまは大いに喜んだふりをしなければならぬ。つらいところだ、畜生め！ 「鯛の塩焼と聞いちゃ、たまらねえや。」実際、たまらないのである。

他のお客も、ここは負けてはならぬところだ。われもわれもと、その一皿二円の鯛の塩焼を注文する。これで、とにかく一本は飲める。けれども、おやじは無慈悲である。しわがれたる声をして、

「豚の煮込《にこ》みもあるよ。」

「なに、豚の煮込み？」老紳士は莞爾《かんじ》と笑って、「待っていました。」と言う。けれども内心は閉口している。老紳士は齒をわるくしているので、豚の肉はてんで噛めないのである。

「次は豚の煮込みと来たか。わるくないなあ。おやじ、話せるぞ。」などと全く見え透いた愚かなお世辞を言いながら、負けじ劣らじと他のお客も、その一皿二円のあやしげな煮込みを注文する。けれども、この辺で懷中心細くなり、落伍《らくご》する者もある。

「ぼく、豚の煮込み、いらない。」と全く意気消沈《いきしょうちん》して、六号活字ほどの小さい声で言って、立ち上り、「いくら？」という。

他のお客は、このあわれなる敗北者の退陣を目送し、ばかな優越感でぞくぞくして来るらしく、

「ああ、きょうは食った。おやじ、もっと何か、おいしいものは無いか。たのむ、もう一皿。」と血迷った事まで口走る。酒を飲みに来たのか、ものを食べに来たのか、わからなくなってしまうらしい。

なんと酒は、魔物である。

底本：「太宰治全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1989（昭和64）年1月31日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月から1976（昭和51）年6月

入力：柴田卓治

校正：しず

2000年5月2日公開

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。